亡くしてから思うようになった。父は苦労話をすることは、あまりなかったが父の姿を見て育ってきたため、おぼろげながらその大変さが思い出される。

引揚げては見たものの、会社勤務は出来ず、慣れない魚屋（鮮魚等を自転車に積んでの行商）等をやったり、和歌山の梅の実の販売をして（梅の実はすぐ黄色くなり商売としてはむずかしかったようだ。現在のように運送手段が発達していないため）大きな借金を負い、それが長い間、足を引っ張ることとなった。

何度か職を変え、どうにか我々兄妹三人の高校卒業を見るまでは苦労し、大変なことだった。母が生存しておれば気分的にも、又家庭内のことでも楽ではなかったか。

人生には運、不運があり、苦労する人、しない人、あるけれど、敗戦後の日本人は、大多数の人びとが苦労し、（一部の人は闇、又は不正で、もうけた者もいたが）頑張り抜いて生きてきたことを心からよろこびたいと思う。

"母子家族"

東京都　砂口禮助

戦後、日本人は台湾から引揚げなければならなくなった。家はもちろんのこと、家財道具一切を放棄しなければならない。

父は香港陥落の前日、病で亡くなり、兄は予科練に入隊していたので、私達は軍人の家族として、早く日本へ引揚げることが出来た。

二十歳の姉、十五歳の私、下に弟と妹二人、五人姉弟の母子家族、父がいれば準備は手早く出来たであろうが、一応持ち帰る物の用意が出来た頃、"二日後に集合せよ"という知らせがあった。当日の朝、私達は人力車を呼び、乗りこむと、どこからともなく現われた中国兵が「接収」という赤紙を玄関に封印してしまった。悔しいというか、情無いというのか、じっとたえてうしろも振りかえらず、わが家を去った。

空襲で被爆している台湾総督府に来たものの、薄暗い裸電球の下で一晩過ごし、翌日トラックに乗せられて汽車に乗る所まで来た。そこには客車ではなく、貨物車が並んで待っていた。

私達はなんとか座ることができた。とにかくすし詰めに押し込まれて発車した。貨車の入口を閉めると暗くなるので、落ちない程度に開けていた。走っては止まりの繰り返しで、港までの距離は二十五キロ弱なのに、朝出発して夕方に着いた。

着いた場所は天井の高い港の倉庫、迎えの船が来るまで待っていることになった。私達の前にも何百人、後にも続々と到着しているので、何日待たされるかわからない。二日ぐらい留まったと思うが、明日乗船するという知らせがあり、その前に荷物検査をするという通達があった。一部の人から、貴金属とか危険物が見つかると、没収されて、送還拒否になるということが伝えられた。母と姉は、隠し持っていたダイヤの指輪や宝石類を、見知らぬ台湾の人達に渡してしまった。

検査の日、白い布に包んだ父のお骨を前にして並んで待っていた。

隣まで来た検査官は、ふとんを広げて調べている。私達の前に来た検査官は、荷物を一まわり見て、骨箱に手を触れただけで通り過ぎてしまった。気を張りつめて待っていた母子六人はがっかりしてしまい、昨日手放した宝石類が悔しくなってきた。検査の後、皆はこれで日本に帰れるのだという安心感から、それぞれの荷物を広げていた。

かしこい人は、五十銭紙幣を、ぐるぐる巻きにして持っていたのには驚いた。

迎えの船が来た。アメリカのリバティー型輸送船だという。子供心に船に乗るという嬉しさはあったが、生まれ故郷を離れて、もう二度と来ないであろうという淋しさはなかった。

港を出ると、波はおだやかで静かな航海であった。一夜明ける頃には、船は大揺れに揺れだした。波と波の間に船が沈み、波の上になるとスクリューのからまわりする音が不気味に聞こえる。

シケの二日目に、突然船は大きく横揺れを起こした。

ぎっちりと寝ている人達の上に棚の荷物が落ちてきた。船内は阿鼻叫喚の大騒ぎ、それでも船は何事もなかったように一生懸命に走り続けた。

五日目の朝、目の前に箱庭のような陸地が現われた。これが日本か、こんな美しい島が日本の領土なのか、思わず嬉しさがいっぱいであった。ここは南紀白浜の港だと知らされた。夕方上陸することになった。

桟橋を通って並んでいると、いやおうなしに頭の先から首筋に白い粉を注入された。それはＤＤＴというものであった。今までにシラミというものに出会ったことがなかったので驚いた。

夜の食事が並べられている。皆が「お赤飯が出ている」引揚者を歓迎しての祝膳だと思ったが、高粱の入った飯だった。

翌朝汽車に乗り、それぞれの故郷に向かった。

しばらく走ると、「塩が降ってきた」といって騒ぎ出した。台湾生まれの私達には、雪に会ったのが初めてだから無理はない。

私の本籍は広島市であるが、原爆で跡形もなく無くなっているというので、母の母親が住んでいる大津市に帰った。祖母は母の妹の家族と住んでいたので、その家の居候となった。

役所に転入届を済ませ、米穀通帳を米屋に持っていけば、一俵ほどの米が届いた。台北の地を離れて今日までの日数と六人の数で届いたという。

祖母も叔母の家族も、白米のご飯が食べられるということで大喜び、その居候も三か月と続かなかった。お米が無くなるとじゃまだといって、家を追い出されてしまった。

一人千円の持参金が無くなる頃、私たちは途方にくれた。しかたなく母はもう一人の妹に頼み込み、二階の六畳一間に間借りすることになった。父でもおればこんな苦労をしなくても、とひがみたくもなるが、とにかく父親がいないというだけで、今日まで言葉に言い尽くせない苦労があった。私達母子は頑張るよりしかたがないと思い、頑張ってきた。

母子家族で生きてきたからといって、人をうらむことはなく、苦労を苦労とも思わないで生きてきた。

大津の中学校に転入した後、高校生となり、奨学金を受けて卒業することができた。小さい頃から医者になろうと思って勉強してきたが、兄はまだ復員していない、家の経済も見なければならず、進学を断念し、働いた。

今思えば、私達の引揚げ苦労などは、満州からの引揚者に比べれば、三度の食事を与えられ、持てる物を持ち、家族が一緒になって帰れたということは、本当に幸せだったと思う。

引揚者の見果てぬ夢

東京都　根岸要八

私は幼い頃より受けた教育を忠実に守り、義は山嶽より重く、死は鴻毛よりも軽しと覚悟し、困苦欠乏に堪えながら与えられた仕事に努力していた。

八月十五日、チモール島で、終戦を初めて知らされたのであるが、現地軍は戦争継続の意見が大勢を占め、あわてた中央部は、天皇の特使を派遣して現地軍の説得にあたらしめ、ようやく終戦を決定した。

私は縁あって昭和九年英領香港の蓬莱漁業公司（後で日本水産株式会社に吸収合併）に就職以来、台湾の基隆、高雄に転勤、最後はチモール島事業所（在チモール島台湾軍経理との傭船契約に基き、日本水産チモール島事業所に漁船八隻と共に派遣）で終戦を迎えた。

その後不毛の地スバワ島ロポック収容所に監禁され、昭和二十一年五月二十日名古屋港に上陸、沼田市の郷里に帰った。チモール島派遣時、台湾の高雄市に残置した家族、妻と長女三歳、長男の零歳は無きものとあきらめていたが、帰郷して初めて家族の無事生還していたことを確認した。

チモール島派遣以来、引揚げまで約二年、漁船は食糧輸送（チモール島スラバア間）を担当、八隻全般敵機に撃沈され、終戦監禁後は野草と野生の小動物で生命をつないでいた。

生まれたばかりの幼児を抱えての空襲下の妻子の生